
ところで陸上部のマネージャーとはどれだけ重労働なのだろうか

石定 ン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ところで陸上部のマネージャーとはどれだけ重労働なのだろうか

【Nコード】

N5052BA

【作者名】

石定 ン

【あらすじ】

ニート街道まっしぐらだった羽生馨は、文化祭で労働する意義について考えた、それでもやっぱり小説を読むだけの人間になったら、突然相嶋がマネージャーになってほしいという。

渋々了承する羽生の前に一体何が待ち構えているのだろうか。

(前書き)

お久しぶりです、石定です。

と、いうわけでニート兄最新作なのですが、まあ文字数は安定の2000文字台。

とりあえず寒い。寒すぎる。日本列島はきっと暑がりなんだ、そうなんだ、と思っっていたら、夏も暑い。これはちょっとした異常気象なんだろう。

あの文化祭から一ヶ月が経過していた。

僕は相も変わらず小説ばかり読んでいたのだが、あの日を境に相嶋さんや男友達とはちよくちよく話すようになり、僕の中の何かが変わってきていた。

多分それは夕焼けの綺麗な秋だったはずだ。ビルが赤く染められているのを窓越しに眺めつつ、小説を読んでいた。

高校生男児としては比較的整頓されていると信じたい机の上の携帯電話が鳴った。

気づけばもう暗くなっていた。小説に熱中するあまり周りが見えなくなるのは昔からの悪い癖だ。

9割方男友達だろうと思いつつ携帯電話を見ると、そこには相嶋さんの文字が写っていたので、不振に思いつつ、電話に出る。

「もしもし……。羽生君？ ……」

相嶋さんがひどく息切れしていたので僕は多少驚いた。

「どうしたの？ ひどい息切れだけど」

「いや……。ちょっと走ってきたから……」

なるほど、走って学校から帰ってきたらしい。それは別にいいのだが、それは僕に急な用事があるのだろうか。まさか陸上部のマネージャーをやれだなんて言わないよな……。

「陸上部のマネージャーをして欲しいの」

僕の予感的中した。この陸上素人の僕にマネージャーを頼んだのだ。だいたいマネージャーって女子がやるようなものじゃないのか。

その疑問を相嶋さんにぶつけると、

「うっん、大丈夫。男子でも女子でも規約上大丈夫だから」

なるほど、ってそういう問題じゃない。

「なんで僕がマネージャーを？」

相嶋さんはその理由を答えてくれた。なんとも前のマネージャーが受験を理由に退部し、マネージャーを急遽用意する必要があったそう。そこで、心当たりがあると相嶋さんが僕にマネージャーを頼んだ、と。

なんと傍迷惑な。自分の問題は自分で解決しろよ、と言うとなんて言われるかわからないので黙っておく。

「頼むよ！もう羽生くんしかいないの！ねっ！この通りだから！」
もう、というより僕が最初なんじゃないのか、だいたい電話越しでこの通りと言われても、どの通りなのかさっぱり分からない。

だが、仕方なく僕はマネージャーになることを了承してしまった。女子は怖い。何をされるかわかったものじゃない。そんなことを考えながら僕は窓の外を眺めた。街灯に蛾が張り付いていた。

陸上部マネージャーの朝は早い。というのも、陸上部の朝練が七時三十分からで、僕は少なくとも七時には起きていないといけないのだ。

これほどまでの拷問があるだろうか。いやない。
家を出ると、当然学校へ向かうわけだが、僕にはそれがもう早朝トレーニングのように感じる。やっぱり拷問だ。マネージャーになることを了承してしまった十数時間前の自分が憎い。

朝日が僕の顔に突き刺さる。そろそろ寒くなってくるあたりで、寒空の中を早朝から学校に向かって歩いて行くとなると今からうんざりする。

だが仕方なしに工程の前に経つと、陸上部の面々がもう集まってきた。現在時刻七時二十分。むしろ僕が遅い方なのかな、と悟ると、体育着姿の相嶋さんがこちらに向かって走ってくる。

「いきなり言っでごめんね！今日は珍しく顧問もいるから挨拶しに行っよ！」

「別にいいけど、寒くないの？」

相嶋さんの格好　というより、陸上部全員のカッコは半袖短パンに統一されている。僕から見たら痛々しい光景だ。

「別に寒くないよ！もう慣れちゃった」

相島さんはいつもの朗らかな笑顔を僕に向けると、再び工程の中に入っていく、僕も工程に入ると、陸上部員からおー、という声が漏れる。

相嶋さんが顧問教諭の前に立つと、

「カントク！この人が新しいマネージャーです！」

「そうか。うむ、よろしくな、羽生！」

カントクと呼ばれた顧問教諭は、松尾教諭で、英語を担当している。中年男性とは思えないほどの体格がよく、若々しい黒髪をなびかせており、一見すると怖いイメージを与えるが、実際はその真逆で、普段から生徒に優しく接している教諭であり、生徒からの信頼もある。

「よろしくお願いします」

僕が頭を下げると、松尾教諭は満足したように頷き、陸上部員たちに自己紹介してくれるよう指示する。

僕がそれに従って、陸上部員たちの前に立つと、何人か見知っている顔が見える。陸上部は男20人、女8人の部活で、それに僕が加わったから29人となるのだ。

「羽生馨です。よろしくお願いします」

再び僕が陸上部員たちの前で頭を下げると、陸上部員たちもお願いします！と返してくる、運動系はみんなこんな感じなのか。

男子部員が一步前に出てきた。ん？何だ？

「自分は部長の藤堂雄輔と申します！よろしくお願いします！」

なるほど、部長か、しかひ藤堂先輩は僕より歳上なのに僕に対して敬語、しかも頭を下げるなんて。僕も慌てて頭を下げる。しかしすごい声量だ。応援団か合唱部行けよ、重宝されるぞ。

松尾教諭がこちらに歩いていくと、校庭の脇にあるベンチに座って、資料を読んでおいてくれ、というので、おとなしくそれに従って、資料を読み始める。

その間に松尾教諭は部員たちに何か指示したあとに部活スタート。

七時三十分ジャストである。

結局その日は校庭を走ったり短距離を鍛えたりなどで終わった。

僕が松尾教諭に挨拶し、そのまま校舎内に戻っていく。もうすっかり教室は制服の姿で埋め尽くされており、僕は多少萎縮しながらも、自分の席に座った。

そのうちチャイムがなって、担任が入ってくる。

やれやれ、これから忙しくなりそうだな　そう思いながら僕はカバンから筆箱を取り出した。

(後書き)

それではまたっ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5052ba/>

ところで陸上部のマネージャーとはどれだけ重労働なのだろうか

2012年1月14日09時47分発行